

# ダンス学習におけるコミュニケーションに関する事例研究

原 田 純 子

## 1. はじめに

今日の学校教育は、自己探究・自己実現に努める調和のとれた人間の育成を目指し、創造性の陶冶を促し個性を生かす教育の充実を目標としている。

児童・生徒の創造活動と創造性については、トーランス (Torrance, 1968) がその評価のチェックリストとして20の項目をあげているが、それらの中には『一人でいられること』と『他者との関わりを持つこと』の相反する2つの項目が含まれている。このことはすなわち、自分自身との対話により自己を深く見つめること、他者との豊かなコミュニケーションをはかることが創造性の陶冶にとって有効であることを示唆している。

ところで、体育の中にあつて他の運動領域とは性質を異にするダンス・表現運動が、この創造性の陶冶に寄与する活動であることは先行研究<sup>1)</sup>においてすでに明らかであるが、具体的にダンス学習の経験の中でどのような局面が創造性を豊かにするのかという点に関してはまだ検討の余地がある。そこで、本研究では先のトーランスの論を手掛かりに、コミュニケーションという視点からダンスの創造活動を捉え、ダンス学習の過程において生まれる自己および他者との豊かなコミュニケーションの経験が創造性の陶冶を促し、個性の発現を導くであろうことを仮説として設定する。

## II. 研究目的

本研究では、ダンス学習の過程におけるコミュニケーションのかたちを具体的に把握するとともに、その経験が創造性の陶冶に寄与するであろうという上記の仮説を検証することを目的とする。

## III. 研究方法

研究の対象としたのは M 女子大学文学部教育学科初等教育専攻生 (教科体育Ⅱ (表現運動)) の受講生 (2年生) 98名に対して、授業終了時に提出を求めたレポートである。『自らの体験を通して感じた、小学校期における表現運動実施の意義および価値について述べよ』と題して課したこのレポートから、学習者を考える表現運動の意義及び価値に関する記述を KJ 法で分類し、ダンス学習において生まれるコミュニケーションの具体的なかたちを捉え、そこにおける創造性の陶冶・個性の発現について考察した。期間は1995年4月18日から7月11日の授業、計12回である。

## IV. 結果および考察

学習者の記述から、まず活動そのものにおいて

常に自己とのコミュニケーションが行われていると考えられる。すなわちイメージやアイデアを煮詰め、動きを生み出すことは、現在自分が何を感じ、考えているかを自身に問いかけ認識すること、つまり自己との対話から始まるのであり、そこから学習者は「今まで知らなかった自分を開拓」し、「新しい自分を発見」している (「」内は学習者の記述から引用)。「自分の中に色々な可能性が詰まっている」という気づきはグループ活動においての話し合いや、動き出して他者とのコミュニケーションを行なうことからも得られている。そして「友達の意見を尊重」し「皆で協力する」という態度や、「同じテーマを与えられても一人一人感じ方、捉え方が全然違う」というように「個性の表れ」も他者との関わりから認識されている。また発表の段階では「言葉を越えた表現の世界で、相手と身体で語り合える」という記述に見られるように、一つの空間においてお互いを感じ合いながらイメージを共有して動くという身体表現に特有のコミュニケーションが成立していることが分かる。さらに鑑賞の体験では、「他のグループの表現に自分達とは異なった動きを見つけたときには新鮮な驚きがあり、関心が高まる」や「お互いの発表を見て理解し、評価し合える喜びがある」というようにグループ相互のコミュニケーションが行なわれていることが推察できる。また「一人一人の個性に触れることの活動は先生と生徒の心の交流になると思う」という記述から指導者とのコミュニケーションも成立しているといえる。ここでは紙面の都合上各々の記述数にふれることはできないが、以上の4つのコミュニケーションのうち指導者との交流に関する記述が最も少なかった。それはおそらく、このダンス学習が、指導者が与える (教える) ことが全てではなく、むしろ学習者同士が『自分達で感じ、考え、行動する』ことが主眼となっている活動だからであろう。その意味では指導者もまた、学習者とのコミュニケーションを通して共に育つことができると考えられよう。

## V. まとめ

ダンス学習では、以上見てきたように大きく4つのコミュニケーションが生じていることが明らかになった。学習者は活動の中で自他と語り、イメージを共有しながら表現し、他者との異なりを認識している。そこには個性を尊重し、マズロー (Maslow, 1986) が言うように自他共に向上を続けようとする創造的態度を見ることができた。

これら4つのコミュニケーションは単独に存在するものではなく、相互に往来しながら、常に自己を豊かにするものであろう。

1) 柴真理子他「ダンス学習の意義と創造性教育」兵庫体育学研究収録 (17):43-56, 1991.